

作物名：いちご

病害虫名：炭疽病（病原：*Colletotrichum acutatum*、*Glomerella cingulata*）

1 被害の特徴と診断のポイント

(1) 葉、ランナー（写真1、2）

- 葉身には直径数 mm 程度の黒色汚斑状の円形病斑を生じる。
- 葉柄やランナーには紡錘形の黒色病斑を生じる。中央部には鮭肉色の孢子塊を生じるときがある。

(2) クラウン

- 病勢がクラウンにまで進展すると、クラウン断面の外側から内側に向けて腐敗、褐変し、株の萎凋や枯死を引き起こす。株の萎凋を引き起こす病害として萎黄病、疫病がある。萎黄病はクラウンの導管部を中心に褐変するので見分けることができるが、疫病とは外見上判別が困難なため、診断は検鏡等を行うのが望ましい。



写真1 葉身の病徴

2 伝染源・伝染方法

- 一次伝染源は親株や被害残さに形成された分生子である。
- 病斑に形成された分生子は、雨滴や灌水時の水滴の跳ね上がりとともに飛散し伝染する。

3 発病しやすい条件

- 発病適温は 30℃前後で多湿時に発生が多くなる。

4 防除方法

(1) 耕種的防除

- ほ場をよく見回り、発病株や周辺の株及び残さは、直ちに抜き取り、早急にほ場外に持ち出して、土中に埋める等、適切に処分する。
- 過度な窒素施用は発生を助長するので避ける。
- 葉かきは晴天時等、湿度の低い時に実施する。また、かき取った葉はほ場に放置せず、ほ場外に持ち出して処分する。
- 本病は水滴の跳ね上がり等で伝染するので、灌水はチューブ等を使用し、頭上灌水は避ける。
- 灌水早朝に行い、高温時には極端な灌水は避け、遮光を行う。

(2) 化学的防除

- 症状がみられない株も潜在的に感染している恐れがある。温度や湿度等により発病し、被害が拡大する恐れがあるので、定期的に薬剤防除を行う。
- 本病は水滴の跳ね上がり等で伝染するので、露地栽培の場合（親株・仮植床）、降雨後は重点的に薬剤防除を行う。
- 施設栽培では多湿にならないよう換気を行う。



写真2 葉柄の病斑